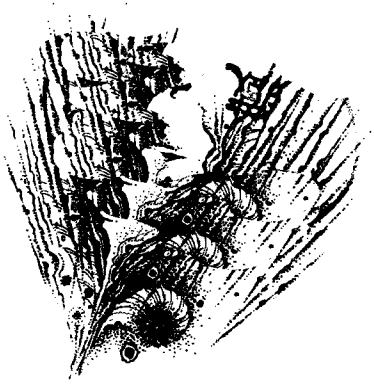
ルタイ・雑人撲滅週間

倉橋由美子

倉橋由美子全作品

1



新潮社版

倉橋由美子全作品1
一九七五年一〇月一五日印刷
一九七五年一〇月二〇日発行
著者倉橋由美子
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四一一
振替東京四-八〇八
二光印刷 新宿加藤製本
定価九五〇円

© Yumiko Kurahashi
Printed in Japan 1975
〈第一回配本〉

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

倉橋由美子全作品1 目次

雑人撲滅週間 5
パルタイ 19
貝のなか 37
非人 57
蛇 79
婚約 123
密告 183
囚人 213
死んだ眼 239
作品ノート1 255

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

倉橋由美子全作品 1

雑人撲滅週間

Kはその朝公報をみて、《雑人撲滅週間》が始まっているのを知った。かれは公報のうえにおもわずよだれをたらし、びっくりしてそれを吸いとると、鏡にむかった。古くなったコッペパンのようなかおが広い面積をしめており、その下にパジャマに包まれた巨大な腹が、これまたかさばった飼料袋のようにつきだしているのがみえる。Kは鏡のまえで愛想笑いをした。それからかれは鏡に笑いかけながら、「上着！」とかれの妻にどなりつぎの瞬間差しだされるはずの上着を受けとろうと後手に腕をのばしてひろげた指で空気をひっかくのだった。だがだれもいなかった。《はは》とかれは自分で上着を探しながら口のなかでぶつぶついった。《あいつ、雑人撲滅令にひっかかってやられたかもしれないぞ。朝から出歩くからだ》三十階にあるかれの部屋から下の街路をみおろすと、黒ずんだ画鋲のようなものがいちめんにまきちらされ、駅の方へ移動していくのがみえた。

《蟻？　いや人だ、これは》

Kは上着を着ようとしたが、なかなか腕がはいらない。腕がはいると、こんどは胴まわりがひどくきゅうくつで、いつのまにかちんちくりんになっているのだった。《ぼくはふとったんだ》とかれはおもいながら、やはりちんちくりんになったズボンをいっしょうけんめい腹のうえにひっぱりあげると、部屋に鍵をかけて大学へ出かけることにした。

「やあ、先生」と階段のところで下からかけあがってきた理髪師が叫んだ。「おくさんがさっき、この集団住宅のまえでやられましたよ。市の衛生課の臨時雇員だとかいうやつでさあ。一撃でまいっちゃいましたよ」

「そうですか、一撃で」とKは重たそうな腹の皮を揺り動かして笑った。「なかなか腕ききじゃありませんか。ところでだれですかやられたのは」

理髪師はほとんどつかみかかろうとするはげしさで腕を振り、Kを指さした。「おくさんですよ、先生の」

そして理髪師は非難でねじまげられた口をあけ、桃いろの舌をめらめら吐きながらあえぐのだった。

「ああ」とKは狼狽したように頭を振った。「ぼくのおくさん。それはそれは。お気の毒なことで。……いかがですか、駅までいっしょに。よかったら」

すると理髪師は、これから出勤するのでいっしょにいこうと答えた。「ここで待っていてくれませんか、二、三分で用意してきます」

「どうぞどうぞ」とKはいった。そして理髪師が自分の部屋へ走っていくのをみとどけると、Kはふくらんだカバンをこわきにかかえこみ、どたどたと階段をかけおりていった。《ぼくはなぜエレヴェーターに乗らないのか》とかれは走りながらおもった。やっと下まできたとき、熱くなった心臓が口へこみあげてくるかんじだった。

「タクシイ!」とKは叫んだが、きょうにかぎって車のかげひとつみえなかった。非常によく晴れた朝だった。しかしいまは通行人もまばらで、かれらがせかせかと足を運んでいく路面にはところどころ黒っぽいしみがみられた。《市の衛生課員たちが活躍しているらしい》とKはおもった。《つまり、あれは……》

「逃げたってだめですよ、あなた」そういってふいにKの肩をたたいたのはさっきの理髪師だった。もう白衣に着換えていた。Kはびっくりしてまぶしそうにまばたきした。理髪師はKのまばたきをみてぎょっとしたように一歩後退した。

「どうかしましたか?」

「いや、なんでもありません。ところで困ったことになりましたね」と理髪師はおびえたようすでいった。

「そうでしょうね。駅まで歩くのですか」

「もちろんです。はやく歩いてくださいよ。危険ですよ」

「なにがですか?」とKはほとんど恥しそうにいい、それでも、ぽったりと重たい脚をせいいっぱいすばやくまえへ出そうとするのだった。

「つまり」と理髪師は多少腹だたしげにいった。「殺人官がわれわれを狙ってるんですよ、あなた。マークされるとただちに市の衛生課の臨時雇員がやってきます。撲殺ですよ。わかりませんか」

「ああ」とKは息を切らしながらいった。「しかしもっとゆっくり歩いてくれませんか。けさはどういうものか、股ずれがして走れないんです。急に、えらくふとったもんだ」

理髪師は軽蔑をあらわして立ちどまった。「しょうがないな、大学教授って。あなたそんな調子ではほんとに撲滅されますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

「ぼくはそういう運動には賛成なんですが」とKは汗をふきながらいった。「しかし政治的な問題にはあまり立ち入りたくないですな」

そのあいだにひょろひょろした理髪師の後姿は駅まえの人ごみに吸いこまれていった。

《ああ、のどがかわいた》とKはおもった。

電車はわりにすいていた。Kはぼんやりと最前部の車に乗りこんだが、かれの上下左右にかさばった体軀が入口を通過すると、うしろにひしめいていた学生の一群がどっと空席へ殺到した。Kは突きとばされておもわずよろめいた。もうかれの坐る席はどこにもなかった。Kはどこか腰をわりこませるすきまはないものかときょろきょろした。

「きみ、ちょっとよってくれないかね」とかれは三十センチばかりのすきまをみつけて両側の学生にいった。しかしかれらは——そしてほかの乗客もすべて、首を電車の進行方向にかしげ、かおの筋肉をゆるめてねむっているのだった。Kはてれかくしのように笑い、ざらざらした頬をなでた。《ひげを剃るのも忘れたな》

Kは運転室のうしろに立って、自分の方へかぎりなく繰りこんでくる長いレールを眺めていた。電車はなめらかに走りつづけた。しばらくたったとき、Kは前方のレールのうえに土嚢のようなものがずらりと並んでいるのをみた。《これは脱線するぞ》Kはおもわず嬉しそうに笑った。レールぎわに赤い腕章を巻いた男が数人立っており、かまわずに通過せよという合図を運転手に送っているらしかった。電車は一段とスピードをあげ、いねむりしている乗客はいっそう将棋だおしに傾いていった。だがそのなかに一人だけ乗客の傾きをくいとめて垂直に坐っている男がいるのをみて、Kは奇妙な気がした。《あれが殺人官かもしれない……》とおもいかけたが、そのとき電車は土嚢のうえにさしかかり、やわらかい、弾力にとんだものの轢断されていく震動がKの足の裏に伝わってきた。

「やあ、Kさんじゃありませんか。どうしました、その上着は？」と教授控室でKの同僚の一人が声をかけた。Kはよく理解できないまま、パチパチとまばたきした。するとKをとりまいて親愛の笑いを浮べていた同僚たちはいっせいに頬の肉をひきしめ、ゆきばを失った笑いが、よだれのようにかれらの口のまわりをさまようのだった。

「どうかしましたか？」とKはいい、鏡に自分の姿をうつした。いつのまにかズボンはまるまるした腹の下にずりおち、上着はしわくちゃになって昆虫の抜け殻のように肩のあたりをつつんでいるだけだった。上着とズボンのあいだ

にヘソがのぞいていた。Kはそれをみて間歇的に笑った。そしてまたせわしくまばたきすると、鏡のなかの男もまばたきした。それはかなり奇妙なまばたきで、Kの眼の下にたれさがった下まぶたが、すばやく、神経的にひきあげられる運動からなっていた。《カラス》とKはおもったが、なぜなのか、よくわからなかった。振りかえってみんなのまばたきをたしかめてみようとおもった。しかし教授たちはいっせいに眼をそむけ、あるいは眼をふせるのだった。

Kはこのなりゆきに少からず気をもんで、上着をひっぱりおろし、ズボンをひきあげようとところみるのだが、上着は横じわがよって蛇腹同然になり、手をはなすと勢よくめくれあがるのだし、ズボンはどうやってみてもかれの腹の最大突出部よりもうえにはあがってこないのだった。Kはもじゃもじゃの髪をかきまわしてフケの霧を散布した。「どうも失礼しました」Kはとつぜん相好をくずして笑いだし、近くにいた小男の首筋をつかんで宙に吊りあげると、鼻と鼻をすりあわせ、頬をなめて親愛の情をあらわそうとした。「失礼ですが、あなたはどなたでしたか?」とKがいうと、相手は苦しげにかおを怒張させ、床のうえに尿を失禁しながら叫んだ。「ぼくは、ぼくは助教授のポエトンですが、あなたは……」

「ああ、ポエトンさん。ぼくはKでした。外国文学主任教授のK・ゾルバッケンだとおもいます」

「すみませんが」と相手はほとんど絶望的なかおをして弱弱しく嘆願した。「ぼくをおろしてくれませんか」

「そうですか、それは残念ですね」Kはがっかりして手をはなした。せっかくの厚意が相手の気まぐれから裏切られた気もちだった。

なりゆきを見守っていた教授や助教授たちは、このとき一列になって隣の部屋へ移動して行った。Kはびっくりしてかれらを見送った。《これから教授会でもあるのかしら?》だが床のうえには点々と脱糞してあり、それらがまだ湯気をたてているのをみてKはかっとした。《無礼な連中だ!》

冷房装置が故障なのか、陽が高くなると部屋はひどく暑くなってきた。Kは大きなカバンをかかえて、あいている教室はないかと廊下をうろうろした。事務員がKを追ってきた。

「K教授、事務室の会計までおこしください。月給を支払います」とかれはいった。

「ああ」とKは無意味な声をだしてうなった。《月給?》それから急にKは、はっはっと空気を吐いて笑った。

「嬉しいですか、教授？」と事務員がたずねた。
「嬉しいですとも」Kは胴をよじり、奇態なリズムで腰を振ったが、それはズボンをひきあげるためだった。事務員はにやにや笑いバンドがうしろで切れているのだと注意した。Kは恥しさで耳たぶに血の気がのぼるのをかんじた。
「これはけしからん。悪辣な陰謀ですよ。これは」とKは叫んだ。事務員は横柄なかおをして左右に首を振るのだった。

会計で月給をもらうと、Kは封を切ってなかみを数え、満足して教室の方へひっかえした。かれは講義の下調べをまだやってなかったので、あいている教室をみつけるとカバンをあけ、準備にかかろうとした。しかし出てきたのは汚れたナプキンや牛尾の燻製、フカのヒレ肉の罐詰などだった。フカのヒレはKの好物だった。しかしどうしてこういうことになったのか、かれには見当もつかなかったが、それらをみると空腹をかんじたので、まず牛尾の燻製に手をつけた。上下の顎が力強く嚙みあわされ、コリコリした牛尾がじょじょに口のおくへ消えていくのは、機械の運動をみるようだった。《この罐詰はどうしよう》Kはカバンをひっくりかえしてみたが、罐切りはでてこなかった。《ばかなやつだ。罐切りくらい入れておくもんだ》とKは腹をたてたが、おもいなおし、罐に歯をたてて強力に嚙み破ってしまった。《なんだ簡単に破れる》ふとKはいつか動物園でみたゴリラをおもった。するといっそう食欲が増進するのをおぼえた。二罐めを半分ほど食べるとKはみちたりた気もちになり、机にかおをふせてうとうとしはじめた。

Kの頭からいびきとともにもれはじめた黄いろいイマージュの幕にぼんやりと殺人官のかおが映りはじめる。イマージュが次第に濃いガス体の幕をつくるにつれて事態はいくぶん明瞭になる。殺人官は妙に自信のない、官吏特有の表情をもち、眼鏡をかけた男で、なにか宗教的な理由からか、頭は丸坊主に剃りあげてあった。半月まえ、《雑人撲滅週間》の実施が閣議で正式に決定されると、多くの命令系統を経て、毛細血管にはいりこみ網の目をなしてひろがっていく血のように、次第に稀薄になりながら、この運動の趣旨がかれら、殺人官のデスクまで伝わってきたのだった。かれらはいたるところで微弱なため息をついて反応した。県庁や市役所はいうまでもなく、警察署、郵便局、国立病院などにもかれらは散在していた。こうした組織の複雑さはほとんどときほぐすことの絶望をかんじさせる。まず大規模に撲滅されたのは無国籍の住民たちであった。かれらは村役場から派遣された殺人官に導かれて共同塵埃焼

却場の竪穴へと行進し、殺人官の巧妙な誘導と激励によって一種の宗教的恍惚のうちに、穴の中へなだれおちた。ついで係員はガソリンを充分注いだのち、これを処理したもようである。しかしながら無国籍の住民を対象としたことは、係員の致命的な誤解にもとづくものであったことが、まもなくあきらかになった。

（いうまでもなく、責任者は処刑、すなわち撲殺された）

それがいかなる性質であるにしろ、ある社会の構成員をなし、他の成員と連帯をもつもの、血や職業上のつながり、ないしは信念、偏見における共通の紐帯でもさしつかえないが、要するに共同社会の一員としての信頼すべき毛なみを有するものは、これを撲滅の対象から除外すべきである。したがって対象としてはまず失業者がとりあげられるはずであったが、かれらはこの運動を実施するにあたって必要な撲殺員として、臨時に大量的に雇傭された。殺人官は街へ進出したデパート、書店、映画館その他は雑人発見に屈強の場所であって、たとえば書店にはいって雑誌を立ち読みしたのち本を買わずに店を出るものは雑人とみなされるし、映画館内で他の観客とともに泣かないものも同様である。

かれらは大量に撲滅された。官庁、会社等では自己の職務に興味をもたない雑人が処分され、その数は三〇〇万にたっしている。学生も約八割ちかく撲滅されたが、それは欠席学生、成績不良学生、およびいかなるサークルにも所属しない学生であった。しかしさらに徹底した運動成果をあげるためには、家族という共同体のなかからも雑人を撲滅しなければならない。たとえば朝起きて家族のだれにも挨拶をしない子どもはただちに撲殺すべきである。一家のだんらんに加わらない家族員にたいしてはいうまでもない。未結婚の若い恋人たちは無条件に雑人とみなしてよい。結婚の手続をとらないということは社会共同体にたいする消極的な反逆であり、おそかれはやかれかれらは人間的連帯からはみだしてしまうからである。幼児および高齢者も撲殺の対象になる。理由は簡明であろう。その他、優生学上繁殖ののぞましくないものは文字どおりの雑人として確実に撲滅された。精神病患者も共同体に参加する能力を有さないものとみなされて撲殺された。かれらはまったく抵抗、あるいは弁明の態度をしめさなかったが、この点は他の種類の雑人に銘記させたいものである。これにたいして困難をきわめているのは、一部の知識人、とくに大学教授、作家、画家、評論家等の処分であろう。

かれらの存在はもっとも不毛かつ無用なものとみなされ

たのであるが、その抵抗は異常にはげしい。学会あるいはジャーナリズムにかんけいをもたない孤立した文化人・知識人はただちに毒殺――かれらには撲殺が通用しなかった――されたが、その他のものは業績と称するものによって社会共同体への連帯度がはかられると主張し、頑強に抵抗をつづけている状態である。問題は今後に残されている。

さて《雑人撲滅週間》はすでにみるべき成果をあげつつあるのであるが、とくに注目すべき点は大衆の協力と自主的な行動力である。この大衆のエネルギーこそが真に雑人を社会共同体から放逐、絶滅するものといってよい。すなわち大衆はあらゆる場所ですんで雑人を指摘し、殺人官に連絡をとる労をおしまなかった。とくに家族内における雑人の摘発は、民間人の協力による以外にその方法がないわけである。ただし大衆自身が雑人を処分する傾向にたいしては厳重な警告を発しなければならない。先日、数十人の雑人学生を轢殺した某大学自治会の措置はその遺憾な例であった。雑人撲滅運動はいまや最高潮にたっしている。しかしながら心中ひそかに人間にたいして無関心をいだいている、いわゆる潜在的雑人の発見はきわめて困難である。いっそうの協力をのぞむ。Kのイマージュのなかに、殺人官の街を歩いている姿がみえる。いくぶん猫背で、たよりなげにまばたきし、空咳などしている。むこうの方には巨大な焼却炉がみえる。議事堂を一時借用、改築したものである。臨時雇員たちがそこへ雑人の死体を運びこんでいる。あちこちで群衆がお祭のように騒いでいる。その群れが、じょじょに水と油のようにわかれると、少数の群れがはじきだされ、その場で撲殺されていくのがみえる……

Kはだれかに肩をたたかれてはっと目をさました。かおをあげると口から糸をひいてよだれが、ほとんど血のように黒く机のうえにたまっていた。

「きみ、あたってるんだよ」と隣の学生が低い声でいった。「はやくしないと先生がここへ来るぜ」

するとKが充血した眼をこするまもなく、黒服を着て背の曲った教授がするするとKのそばへ近づいてきた。

「なにをぐずぐずしてるんです、ええ、きみはやってこなかったんだろう？」

「なんですって？　ぼくはこれから下調べをするところなんですが。きみはだれです？」Kはむっとしていった。

「ぼくがだれかって？」と老人は痛々しく大声をはりあげた。「学生のぶんざいで無礼な！　こういうやつこそ雑人撲滅の槍玉にあげるべきだ」Kはやっと事態をのみこんだ。

「ぼくはK教授だが。K・ゾルバッケンです。学生ではな

い。どうやらあなたの授業にまぎれこんでいたらしいですな」

学生たちがどっと笑った。しかし笑いは天井のすこし下をただよい、そのまま悪意ある喚声に移行して、「撲殺！撲殺！」というどよめきが教室をゆすぶるのだった。Kはあわててカバンをかかえこみ、学生たちにむかって卑下したつくり笑いをみせた。学生たちは凍りついたようにだまった。

「どうも失礼」とKは片手でズボンをおさえながら廊下へとびだした。背中のうしろでばたんとしまったスティールの扉ごしに、「雑人！」という声がかすかにきこえた。

時計をみると、もうとっくにかれの受持授業がはじまっていた。《だれかがやっているだろう……》とKはおもいかけたが、やるのは自分自身だということに気づくと、ぎょっとした。恐怖とも腹だちともわからず、内臓から汗がむやみに分泌してくるのだった。かれは自分の教室を探した。《ここだったな、たしか》しかしかれはなぜか、ちょっとためらった。戸はあかなかった。鍵穴からなかをのぞいてみると、むこうからものぞいている眼があった。

「なんだろう？　おい」と戸のむこうがわで学生らしい声がいった。「みろ、オランウータンか狂人の眼じゃないか、これ？」

そして鳩のようにくっくっと咽を鳴らし、戸に体をぶっつけておしひしめく学生たちの体温が、薄いスティールをとおしてKに伝わってくるのだった。

「あけろ！」とKは教授の貫禄を実感しながらどなった。

「なにかうなってるぜ」と戸のむこうでいった。

「あんまり眼を近づけるんじゃないわよ。危険だから」そういいながら学生たちはかわるがわる鍵穴からこちらをうかがっているらしかった。Kはかがめていた腰をのばし、拳をかためてはげしく戸をたたきはじめた。

「Kだ。K・ゾルバッケンだ。あけないか」するとふいに戸があいた。学生たちがどっと喚声をあげた。Kは気がつかなかったが、いつのまにかかれのズボンは完全にずりおちてその巨大な腹の突起と、ヘソのまわりにうずまく剛毛、しわだらけで力なくたれさがった性器などが学問の尊厳を傷つけているのだった。上着はあいかわらず執拗にめくれあがりいまでは肩の一部をおおう皮膚とみわけがつかないほどだった。

Kはほとんど度を失っていたので、ズボンを外に残したまま教室にはいりこみ、自分でドアに鍵をかけてしまった。かれはせかせかと壇上にあがり、椅子にどしんと坐って汗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong